

創世記18章「神をもてなす」

18:1 【主】はマムレの檜の木の下で、アブラハムに現れた。彼は日の暑いころ、天幕の入口にすわっていた。18:2 彼が目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。彼は、見るなり、彼らを迎えるために天幕の入口から走って行き、地にひれ伏して礼をした。18:3 そして言った。「ご主人。お気に召すなら、どうか、あなたのしもべのところを素通りなさないでください。18:4 少しばかりの水を持って来させますから、あなたがたの足を洗い、この木の下でお休みください。18:5 私は少し食べ物を持ってまいります。それで元気を取り戻してください。それから、旅を続けられるように。せつかく、あなたがたのしもべのところをお通りになるのですから。」彼らは答えた。「あなたの言ったとおりにしてください。」18:6 そこで、アブラハムは天幕のサラのところへ急いで戻って、言った。「早く、三セアの上等の小麦粉をこねて、パン菓子を作っておくれ。」18:7 そしてアブラハムは牛のところに走って行き、柔らかくて、おいしそうな子牛を取り、若い者に渡した。若い者は手早くそれを料理した。18:8 それからアブラハムは、凝乳と牛乳と、それに、料理した子牛を持って来て、彼らの前に供えた。彼は、木の下で彼らに給仕をしていた。こうして彼らは食べた。18:9 彼らはアブラハムに尋ねた。「あなたの妻サラはどこにいますか。」それで「天幕の中にいます」と答えた。18:10 するとひとりが言った。「わたしは来年の今ごろ、必ずあなたのところに戻って来ます。そのとき、あなたの妻サラには、男の子ができています。」サラはその人のうしろの天幕の入口で、聞いていた。18:11 アブラハムとサラは年を重ねて老人になっており、サラには普通の女にあることがすでに止まっていた。18:12 それでサラは心の中で笑ってこう言った。「老いぼれてしまったこの私に、何の楽しみがあるろう。それに主人も年寄りで。」18:13 そこで、【主】がアブラハムに仰せられた。「サラはなぜ『私はほんとうに子を産めるだろうか。こんなに年をとっているのに』と言って笑うのか。18:14 【主】に不可能なことがあるろうか。わたしは来年の今ごろ、定めた時に、あなたのところに戻って来る。そのとき、サラには男の子ができています。」18:15 サラは「私は笑いませんでした」と言って打ち消した。恐ろしかったのである。しかし主は仰せられた。「いや、確かにあなたは笑った。」18:16 その人たちは、そこを立って、ソドムを見おろすほうへ上って行った。アブラハムも彼らを見送るために、彼らといっしょに歩いていた。18:17 【主】はこう考えられた。「わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。18:18 アブラハムは必ず大いなる強い国民となり、地のすべての国々は、彼によって祝福される。18:19 わたしが彼を選び出したのは、彼がその子らと、彼の後の家族とに命じて【主】の道を守らせ、正義と公正とを行わせるため、【主】が、アブラハムについて約束したことを、彼の上に成就するためである。」18:20 そこで【主】は仰せられた。「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、また彼らの罪はきわめて重い。18:21 わたしは下って行って、わたしに届いた叫びどおりに、彼らが実際に行っているかどうかを見よう。わたしは知りたいのだ。」18:22 その人たちはそこからソドムのほうへと進んで行った。アブラハムはまだ、【主】の前に立っていた。18:23 アブラハムは近づいて申し上げた。「あなたはほんとうに、正しい者を、悪い者といっしょに滅ぼし尽くされるのですか。18:24 もしや、その町の中に五十人の正しい者がいるかもしれません。ほんとうに滅ぼしてしまわれるのですか。その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにはならないのですか。18:25 正しい者を悪い者といっしょに殺し、そのため、正しい者と悪い者とが同じようになるというようなことを、あなたがなさるはずがありません。とてもありえないことです。全世界をさばくお方は、公義を行うべきではありませんか。」18:26 【主】は答えられた。「もしソドムで、わたしが五十人の正しい者を町の中に見つけたら、その人たちのために、その町全部を赦そう。」18:27 アブラハムは答えて言った。「私はちりや灰にすぎませんが、あえて主に申し上げるのをお許しください。18:28 もしや五十人の正しい者に五人不足しているかもしれません。その五人のために、あなたは町の全部を滅ぼされるのでしょうか。」主は仰せられた。「滅ぼすまい。もしそこにわたしが四十五人を見つけたら。」18:29 そこで、再び尋ねて申し上げた。「もしやそこに四十人見つかるかもしれません。」すると仰せられた。「滅ぼすまい。その四十人のために。」18:30 また彼は言った。「主よ。どうかお怒りにならないで、私に言わせてください。もしやそこに三十人見つかるかも

しれません。」主は仰せられた。「滅ぼすまい。もしそこにわたしが三十人を見つけたら。」
18:31 彼は言った。「私があえて、主に申し上げるのをお許してください。もしやそこに二十人見つかるかもしれません。」すると仰せられた。「滅ぼすまい。その二十人のために。」 18:32 彼はまた言った。「主よ。どうかお怒りにならないで、今一度だけ私に言わせてください。もしやそこに十人見つかるかもしれません。」すると主は仰せられた。「滅ぼすまい。その十人のために。」 18:33 【主】はアブラハムと語り終えられると、去って行かれた。アブラハムは自分の家へ帰って行った。

導入

先週は、17章からいくつかのことを学びました。

1. 神がアブラハムとの契約を明確になさいました。
2. 神は、アブラムをアブラハム、サライをサラと改名なさいました。アブラハムの新しい名は「多くの者の父」という意味でした。サラの名は呼び方が変わっただけで意味は変わりませんでした。しかし、神がサラの名も変えられたのは、関係性の重要さを象徴するためです。

黙示録2：17から、イエスを信じ、私たちの罪を赦すためにイエスが十字架上でなされた御業を信じるなら、私たちもいつか神から新しい名をいただくことがわかります。この名を与えるために、神の尊い御子イエス・キリストの血が流されなければなりません。ですから、この名には深い意味と思いが込められています。
3. 神はアブラハムに彼が果たすべき契約の条件について教えられました。アブラハムは、しもべや外国人も含めて、一族に属するすべての男子に割礼を受けさせなくてはなりません。
4. 割礼は、神が契約を交わす民と親しい交わりを望んでおられるしるしでした。
5. みことばによると、この契約は永遠に続くものです。

つまり、神とユダヤ人の契約は今も有効だということです。

では、18章の学びを始めましょう。17章から18章までは数週間ほどしか経っていません。割礼の傷が癒えるのに十分な日数と言えるでしょう。

18章は、ふたつに分けることができます。1-15節では、アブラハムが主とふたりの御使いをもてなします。16-33節では、アブラハムと神がソドムについて非常に親しく語り合います。

1. アブラハムが主とふたりの御使いをもてなす。(1-15節)

アブラハムは、日中の暑い時間にくつろいでいました。おそらく正午ごろだったでしょう。皆、涼もうと休んでいました。このような時間にあまり客はやってきません。

しかし、アブラハムは3人の人たちが立っているのに気づきます。アブラハムはすぐさま、その人たちをもてなそうとします。最初は、足を洗って少しパンをつまむように勧めます。3人はその勧めに応じました。

しかし、アブラハムは天幕にいるサラのところに行く、少しの食べ物ではなく盛大なごちそうを用意させることにしました。

3節で「ご主人」と訳されたヘブル語の単語から、アブラハムは早い段階でこの3人のうちのひとりが神ご自身であることに気づいていたことがわかります。

これは実は、人のかたちをした神、イエスでした。旧約聖書に登場するイエスは神学用語で「神の顕現」と呼ばれます。

ヘブル語には、神のみを指す単語があります。それは、「アドナイ(ado nay)」です。ヘブル語にはもうひとつ「アドナイ(ado nai)」という単語がありますが、こちらは、重要人物に対して敬意を表して使われる場合があります。

これを理解すると、アブラハムがこの3人を盛大にもてなそうと頑張ったのも説明がつきます。

ごちそうを囲んで交わされた会話については、重要な部分のみが聖書に記されています。

イエスから重大な発表がありました。それは、サラがもうすぐ息子を産むということです。そのとき、サラは天幕の裏でその言葉をすべて聞いていました。

それを聞いてサラはすぐに笑いました。ヘブル語には笑うを意味する単語が7つありますが、この単語は信じられなくて笑うという意味があります。失礼な笑い方ではありませんでしたが、得体の知れない客のことばをサラは信じられませんでした。

イエスはアブラハムに「サラはなぜ『私はほんとうに子を産めるだろうか。こんなに年をとっているのに』と言って笑うのか。」とおっしゃいました。

それに対してイエスは、「【主】に不可能なことがあるか。」とお答えになりました。そして、定めたときにサラに男の子ができると約束なさいました。

サラは怖くなって笑ったことを否定しましたが、イエスはサラが笑ったと断言なさいました。

ヘブル13：2は、「旅人をもてなすことを忘れてはいけません。こうして、ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました。」と語ります。

食事を用意した人たちは、もてなしている相手がイエスとふたりの御使いだとは気づいていなかったでしょう。しかし、アブラハムは神と語り合った経験があったので、その日の客の正体に気づいていたはずです。

この個所で重要なふたつのポイントについて、ここで挙げたいと思います。

1. 私たちが神に近づきたいと望むように、神も私たちに近づきたいと望んでくださいます。神は、イエスという人の形でご自身が行くのではなく、御使だけを遣わすこともおできになりました。イザヤ書41：8で、アブラハムは「神の友」と呼ばれています。歴代誌第二20：7にも同じように記されています。

オランダの改革派牧師 S.G.デグラーフは次のように言いました。「天地の神である主が、しもべの用意した食卓についておられました。アブラハムは確かに神の友です。主は遠くにおられるのではありません。ご自身の民の近くにいたいと思ってくださいます。神は人を好まれるお方です。畏れ多いお方ですが、息が詰まるお方ではありません。私たちに近づいてくださる主です。」

次に、新約聖書からヨハネ1：14に目を向けましょう。

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」神は私たちのために人となってくださいました。私たちの友となることを望まれましたが、私たちの罪が原因でそれはかないませんでした。しかし、イエスが十字架で私たちの罪を負って死んでくださったので、私たちが神の敵ではなく友となることが可能になりました。

では、ヨハネ14：15-21を読みましょう。

14:15 もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守ら
ずです。 14:16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助

け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。14:17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。14:18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻って来るのです。14:19 いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからです。14:20 その日には、わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおることが、あなたがたにわかります。14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現します。」

ですから、クリスチャンなら誰でも、神はすぐそばにすることがおできになります。そして、聖霊をとおして、友となってくださいます。

これは、素晴らしいことであり、同時に畏れ多いことです。

アンドリュー・ボナーはある聖餐式のときに会衆にこう語りました。「イエスは今、7本の金の燭台の間を歩まれ、私たちが与る聖餐式の食卓にとどまり、主に何かを求めている人がいないか探されます。」

これこそ、主が友となってくださるということです。ただし、私たちが神に近づくなら、何らかの課題を神からいただく覚悟が必要です。

では、次のポイントについてお話ししましょう。

2. 神の約束がどれほど不可能に思えても、神はそれを守ってくださいます。

「【主】に不可能なことがあるか。」という言葉をしっかり検証する必要があります。

というのも、私たちが遭遇するすべての状況にこのみことばを当てはめることはできないからです。

この言葉は、約束と対になっています。私たちは、この言葉が語られた背景を理解しなければなりません。聖書には、すべての信徒に対する驚くような約束が記されていますが、それがどれほど不可能に思えても、ちゃんと成就することを信じて期待することができます。

後ほど詳しく見ていきたいと思いますが、ここで重要なのは、神は何でもおできになるのだからと言って、私たちの望むことを何でもしなければならぬのかのようにこの箇所を引用してはいけない、ということです。もちろん神は癒すことのできるお方です。しかし、ある具体例について癒すという約束をいただいているのなら、このみことばを用いて癒しを要求することはできません。それは、どんな祝福についても同じことです。

神に望む祝福は、すべての信徒に対して神が約束なさっている事柄と対になっていなければなりません。その条件に合致していれば、神は確かに祝福を注いでくださるでしょう。多くのクリスチャンは、条件を満たさずに祝福を求めます。そして、神が期待通りに働いてくださらないと言ってがっかりします。

聖書には、すべての信徒に与えられた約束があります。これらの約束もまたすばらしいものです。

エペソ1:7はリビングバイブルで次のように語ります。

神の子の血を流してまで、私たちの罪を帳消しにしてくださるほど、神様の愛は大きいのです。この神の子によって、私たちは救われました。

新改訳ではこう記されています。

1:7 この方であって私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。

クリスチャンの中には、赦しの約束に確信を得られず、自分の犯した罪で自分を責める人がいます。

カナダの平原地域であった昔々の話をご紹介します。ある父親と娘が草原を歩いていました。はるかかなたから大きな山火事がこちらに向かって来るのが見えました。このままだとふたりとも焼け死んでしまいます。父親は、助かる方法はただひとつだと思いました。その方法とは、自分たちのいる場所で火をおこして周りの草を焼いてしまうことです。

山火事が近づいてきたら、すでに焼けてしまった場所にいることができます。

山火事が近づくと、女の子は怖くなりました。けれどもお父さんは「大丈夫。火はここまで来ないよ。もうここは燃えた後だからね。」と言って娘を安心させました。

赦された人にも同じことが言えます。神の裁きがやってきたとき、その人たちはもう大丈夫です。神の火はすでに過ぎ去ったからです。

イエス・キリストが罪を赦してくださったと心から信じているなら、あなたは確かに赦されています。これが、神から私たちに与えられた約束です。

ハレルヤ！

ここで手短かにあとふたつの約束をご紹介します。

まず、ヨハネ11:25-26を読みましょう。

11:25 イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。11:26 また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」

これは、今の私たちには完全に理解できない約束ですが、時が来ればその意味がわかるようになるでしょう。

次に、ヨハネ6:37を読みましょう。

6:37 父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。

主に不可能なことがあるのでしょうか。その答えは、「ない」です。神が約束なさったことなら、できないことはありません。

では、18章の後半に進みましょう。

2. アブラハムがソドムのことを心配する。(16-33節)

ごちそうを囲んでイエスとふたりの御使いとの交わりを持ったアブラハムは、3人を見送るために途中まで一緒に歩いて行きました。

主は、ソドムとゴモラの罪が深刻であることをアブラハムに明かされました。ふたりの御使いはソドムとゴモラのほうに行ったので、アブラハムと主だけがその場に残されました。

ここで何が起ころうとしているか、アブラハムにはわかっていたようです。おそらく、ロトとその家族のことが心配だったでしょう。

アブラハムは主に、「あなたはほんとうに、正しい者を、悪い者といっしょに滅ぼし尽くされるのですか。」と尋ねました。これはとてもよい質問です。

アブラハムはもっと具体的な数を出しました。「もしや、その町の中に五十人の正しい者がいるかもしれません。ほんとうに滅ぼしてしまわれるのですか。その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにはならないのですか。」そして「全世界をさばくお方は、公義を行うべきではありませんか。」と締めくくりました。

神は26節で、50人の正しい人たちがいたらその人たちのために町を赦すとおっしゃいました。

アブラハムはそこから正しい人の数をどんどん減らし、10人まで減らしました。神は最終的に、10人の正しい人のために町を赦すとおっしゃいました。もしかするとロトの家族は10人くらいだったのかもしれませんが、はっきりとはわかりませんが、その可能性もあります。

33節には、主は去っていかれ、アブラハムは家に帰ったとあります。

主とアブラハムの間で交わされたこの親密な会話から、何を学べるでしょうか。

1. 神は、ソドムとゴモラのために祈るようアブラハムを促しておられた。

主はソドムの罪について理由もなくアブラハムに話されたわけではありません。この情報は、アブラハムがソドムのために祈るよう促すきっかけであったようです。

聖書の他の個所にもそのような例が見られます。出エジプト32：1-14を読みましょう。

32:1 民はモーセが山から降りて来るのに手間取っているのを見て、アロンのもとに集まり、彼に言った。「さあ、私たちに先立って行く神を、造ってください。私たちがエジプトの地から連れ上ったあのモーセという者が、どうなったのか、私たちにはわからないから。」 32:2 それで、アロンは彼らに言った。「あなたがたの妻や、息子、娘たちの耳にある金の耳輪をはずして、私のところに持って来なさい。」 32:3 そこで、民はみな、その耳にある金の耳輪をはずして、アロンのところに持って来た。 32:4 彼がそれを、彼らの手から受け取り、のみで型を造り、鑄物の子牛にした。彼らは、「イスラエルよ。これがあなたをエジプトの地から連れ上ったあなたの神だ」と言った。 32:5 アロンはこれを見て、その前に祭壇を築いた。そして、アロンは呼ばわって言った。「あすは【主】への祭りである。」 32:6 そこで、翌日、朝早く彼らは全焼のいけにえをささげ、和解のいけにえを供えた。そして、民はすわっては、飲み食いし、立っては、戯れた。 32:7 【主】はモーセに仰せられた。「さあ、すぐ降りて行け。あなたがエジプトの地から連れ上ったあなたの民は、墮落してしまったから。 32:8 彼らは早くも、わたしが彼らに命じた道からはずれ、自分たちのために鑄物の子牛を造り、それを伏し拝み、それにいけにえをささげ、『イスラエルよ。これがあなたをエジプトの地から連れ上ったあなたの神だ』と言っている。」 32:9 【主】はまた、モーセに仰せられた。「わたしはこの民を見た。これは、実にうなじのこわい民だ。 32:10 今はただ、わたしのするままにせよ。わたしの怒りが彼らに向かって燃え上がって、わたしが彼らを絶ち滅ぼすためだ。しかし、わたしはあなたを大いなる国民としよう。」 32:11 しかしモーセは、彼の神、【主】に嘆願して言った。「【主】よ。あなたが偉大な力と力強い御手をもって、エジプトの地から連れ出されたご自分の民に向かって、どうして、あなたは御怒りを燃やされるのですか。 32:12 また、どうしてエジプト人が『神は彼らを山地で殺し、地の面から絶ち滅ぼすために、悪意をもって彼らを連れ出したのだ』と言うようにされるのですか。どう

か、あなたの燃える怒りをおさめ、あなたの民へのわざわいを思い直してください。

32:13 あなたのしもべアブラハム、イサク、イスラエルを覚えてください。あなたはご自身にかけて彼らに誓い、そして、彼らに、『わたしはあなたがたの子孫を空の星のようにふやし、わたしが約束したこの地をすべて、あなたがたの子孫に与え、彼らは永久にこれを相続地とするようになる』と仰せられたのです。」 **32:14** すると、【主】はその民に下すと仰せられたわざわいを思い直された。

神のしようとなさることを聞いて、モーセは、民のためにあわれみを求めて祈るよう促されました。

これは、今日の聖書個所でアブラハムに起こっていることと非常に似ています。神がご自身のお考えを語られたことで、アブラハムはソドムのために、そしておそらくロトとその家族のためにも祈るよう導かれました。

私たちも同じです。主が個人的に私たちのところに来て、誰かのために祈るよう促されることはないかもしれませんが、聖霊が誰かのために祈るよう私たちに促されることがあります。そんなときは、その人のためにひざまずいて祈らなければなりません。その人たちがどんな危機に直面しているか、また私たちの祈りがその人たちを助けるためにどう用いられるか、私たちにはわからないのです。

2.正しい人の存在は、神にとって大切である。

16-33節には、非常に大切なことが示されています。それは、よこしまな時代にとって神の民の存在が助けになるということです。

神は、**10**人のためにソドムの裁きを延期してくださるとおっしゃいました。

神は変わらないお方です。今の時代でも、神に対して罪を犯し続ける人々に満ちた場所を滅ぼしたいと思われるかもしれませんが、けれども、神のあわれみによって、正しい人たちのためにその御怒りを押さえてくださっているのです。

キリスト・イエスに従って敬虔な生き方をするのは大切なことです。それは、神の御怒りを当面の間押さえる効果があるのです。

黙示録を読むと、いつか主はご自身の御怒りを地上に、そして地上に住む人々の上に注ぎだされます。神のみことばは一貫していますので、その御怒りが注がれるときには地上からキリストを信じる信徒はすべて取り去られています。

つまり、神はご自身の民を地上から取り去られた上で、ご自身の御怒りを注いで裁かれます。この、地上から取り去られることをクリスチャンは「携挙」と呼びます。

残念ながら、現代のクリスチャンの多くはこの教えを支持していません。けれども、私はこれを信じています。聖書全体の教えからそう信じているのですが、今日の聖書個所もそう信じる根拠のひとつです。

今日の聖書個所から、大切なことをふたつ学びました。

神は、私たちに祈るよう促されることがある。私たちは祈らなければならない。

私たちがキリスト・イエスに従ってきよく生きるのは大切である。神が人々にあわれみをかけられるのは、私たちの存在があるからです。しかしそれは、神の御怒りがこの世に注がれる時が来るまでの話です。

では、今からとても大切なことをします。今から祈ります。